松河戸地区の沿革

7 小野道風伝説

(1) 松河戸誕生の伝説

小野道風（おののとうふう 894~966）は、遣隋使で有名な小野妹子を先祖とし、藤原純友の乱を鎮圧した小野好古の弟、さらに小野小町をいとこに持つ、そんな華やかな家系をもつ道風が本当に、このような片田舎で生まれたのだろうか?　根拠は『麒麟抄』と『塩尻』という二冊の書物にあります。

南北朝時代成立とされる『麒麟抄（きりんしょう）』に「道風者尾張國上條ニシテ生マレ給ヘリ」とあります。

その後、尾張藩の国学者である天野信景（1663～1733）は『塩尻』に「春日井郡松河戸の村民伝云、松河の里は道風の生れし地なりと云云」と記しています。それをうけて松平君山(同藩)が「張州府志」に、この地を誕生地と伝えると述べ、以後尾張藩諸学者の間に通説のようになったようです。

また、誕生地と伝えられる現在の松河戸町には、尾張藩の儒学者である秦鼎（はたかなえ）（1761～1831）撰文の「小野朝臣(道風)遺跡之碑」(図 2)が(文化 12 年 1815)に建てられ、「松河戸の村民はみな道風がここで生まれたということ伝をえている」という内容が刻されています。

(図 1)小野道風肖像
（観音寺所蔵）

伝承では「父の小野葛絃(くずお)が何らかの理由で松河戸に滞在していたとき里人の娘との間に生まれたのが道風だった。幼少時代を松河戸で過ごし、10 歳ころに父とともに京に上り、書で身を立てた。」ということになっています。残念ながら小野葛絃が尾張国に来たという記録はありません。したがって史実とは断定できず、伝承の域を出ないことです。

しかし、少なくとも江戸時代中期ころから松河戸の人々は、小野道風がここで生まれたと信じ、それを誇りとしてきたということは間違いない事実で、これこそが重要な事実です。そして、「私も道風さまのように字が上手になりたい」と考える人も多く、自然に書の盛んな土地柄になりました。

(図 2) 小野朝臣(道風)遺跡之碑

(図 3)小野道風誕生伝説地の祠(旧小野社)

(図 4)小野道風誕生伝説地の祠(新小野社)

※ 現在の小野社の社殿(図 3)（図 4)は、小野小学校の御真影の奉安殿でした。終戦後壊すように命令されましたが、総檜造りで他に類のない立派なもので、取壊すにはしのびずそのままの姿で、「道風屋敷跡」といわれている現在の場所へ社殿として移しました。

区画整理に伴い、新小野社(図 4)は正面を南から東に向きを変えましたが、ほぼ同じ場所に建てられています。同じ場所にあった小野朝臣(道風)遺跡之碑(図 2)は、道風公園の東側に移動されました。

※ 小野朝臣(道風)遺跡之碑(図 2)は、旧小野社(図 3)と同じ場所にありましたが、区画整理に伴い道風公園の東側に移動

7 小野道風伝説

されました。「道風がここで生まれたということを、松河戸の住民は皆が言い伝えている。しかし、確かな証拠が無いのは残念である。百年、千年後でも良いから、誰かこのことを明らかにしてほしい。」という内容が刻されています。

(2) 小野道風顕彰活動

松河戸は道風ゆかりの地であり、昔から書を競う会が盛んで能筆の人の数も多くいました。

しかし、時代の流れと世相の移り変わりや、戦争色が濃くなる中で、書を競う大会も少なくなってきた時、里人の書に対する熱意は児童生徒に大きく期待がかけられるようになりました。

昭和 11 年(1936)に地元書道家の先生方の呼びかけで、「県下児童席上揮毫大会」が小野尋常小学校で開かれるようになり、戦争の最中も中止されることなく現在に至っています。

また、現在の小野道風顕彰活動の契機となったのが、昭和 19 年（1944）に開催された「道風祭、小野道風公生誕 1050 年祭」です。太平洋戦争末期の混乱のなかにもかかわらず、全国から書家・歌人・詩人らの文化人が多数参加し、道風をたたえる内容の詩歌や書作品が奉納される盛大な祭典でした。

その 5 年後の昭和 24 年（1949）からは、道風祭にあわせて全国公募の書道展である「小野道風公奉賛全国書道展覧会（道風展）」が、毎年 11 月 3 日に催される道風祭に合わせて開かれるようになりました。

県下児童生徒席上揮毫大会　昭和 30 年代初め

審査風景

昭和２９年に道風誕生地の県史跡指定がされました。それと前後して公園や記念館を整備しようと全国に趣意書で呼びかけました。
住民総出の勤労奉仕や浄財をもとに昭和 30 年当時春日井唯一の公園として道風公園が完成しました。

翌年 31 年には市内の小中学生の寄付で普段の努力の大切さを教える「柳に跳びつく蛙」の寓話にちなんだ「道風カエル」が設置されました。

▲戦後婦人会での社会奉仕活動

道風公園造りで住民総出の奉仕活動

完成した道風公園(旧)と「道風カエル」

7 小野道風伝説

生誕 1050 年祭やその後毎年の道風展に参考作品として寄せられた書作品は大切に保存され、800 点ほどになっていました。

それらの作品を多くの方に鑑賞していただくために、また、小野道風の偉業を広く知らしめるために「春日井市道風記念館」の建設がされることになり、昭和 56 年 11 月に開館しました。

道風記念館では，道風筆と伝えられる平安時代の書から現代の書まで多数の書を収蔵し、さまざまな書の展覧会や臨書作品の募集などが開催されています。

特に，毎年夏休み期間中には，小中学生向きの企画展やワークショップが開催されます。

春日井市道風記念館

全国の書家から寄贈された作品や道風関係の資料などを中心に、全国でも数少ない書専門の美術館

所在地　春日井市松河戸町 946 番地 2
開館時間　午前 9 時から午後 4 時 30 分
休館日　毎週月曜日（祝日の場合は開館し、翌日休館）
年末年始　（12 月 29 日から 1 月 3 日）
・展示替えのため臨時休館する場合があります。

小野道風顕彰活動の流れ

昭和 11 年	地元書道家の先生方の呼びかけで、「県下児童席上揮毫大会」が小野尋常小学校で始まる。
昭和 19 年	太平洋戦争末期の混乱のなかにもかかわらず、国内の大家も出席して小野道風公生誕 1050 年祭(道風祭)が盛大に行われる。
昭和 24 年	全国公募の書道展である道風展が始まる。(毎年 11 月 3 日文化の日)
昭和 29 年	誕生伝説地が県史跡に指定される。
昭和 30 年	住民総出の奉仕活動により道風公園完成する。
	道風祭時に野外大揮毫大会始まる。
昭和 56 年	道風記念館完成する。
昭和 57 年	道風の書臨書作品展始まる
平成 6 年	道風公生誕 1100 年祭(道風祭)が行われる。

7 小野道風伝説

(3) 道風の業績

小野道風（おののとうふう 894~966）が生きた平安時代中期は、それまで、数世紀にわたり中国文化を取り入れ模倣していた時代に代わって、日本独自の文化を築こうという気運に満ちた時代でした。漢詩に並んで和歌が、唐絵とともに大和絵が、漢字をもとに仮名が発明されるなど、国風文化が花開こうとしていた時代でした。

小野道風は，それまでの書が中国の書の模倣（もほう）であったのに対し，新しい和様（日本風）の書を創始しました。その書はおだやかで美しく、新しい書として高く評価されました。

この和様の書は，道風とともに三跡（さんせき）と呼ばれる藤原佐理（さり）に受け継がれ，藤原行成（こうぜい）によって完成され、その後の日本書道に大きな影響を与えました。

中国風の書を書いた平安時代初期の能書として，空海（くうかい）・嵯峨（さが）天皇・橘逸勢（たちばなのはやなり）の三人は「三筆」と呼ばれています。

(4) 道風の逸話

庶民出の母を持つ道風は、藤原氏が権勢を誇る時代政治的出世を断念して幼少より得意とした書道に精魂を打ち込んだと思われます。

道風が、自分の才能を悩んで、書道をあきらめかけていた時のことである。ある雨の日のこと、道風が散歩に出かけると、柳に蛙が飛びつこうと、繰りかえし飛びはねている姿を見た。道風は「柳は離れたところにある。蛙は柳に飛びつけるわけがない」と思っていた。すると、たまたま吹いた風が柳をしならせ、蛙はうまく飛び移った。道風は「自分はこの蛙の様に努力をしていない」と目を覚まして、書道をやり直すきっかけを得たといいます。

ただし、この逸話が書かれている最も古い文献は江戸時代中期の随筆「梅園叢書」です。浄瑠璃『小野道風青柳硯』（宝暦4 年〈1754年〉初演）などで広まりましたが、史実かどうか不明です。その後、第二次世界大戦以前の日本の国定教科書にも、この逸話が載せられ、多くの人に広まりました。戦後の道徳の教科書にも採用されています。

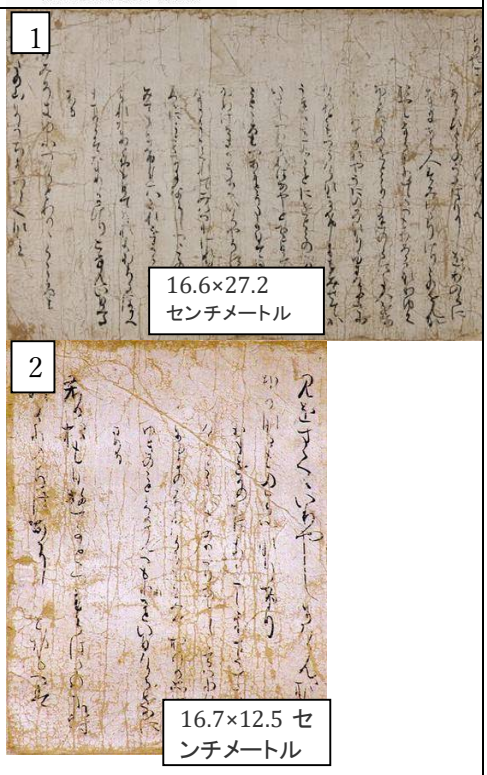
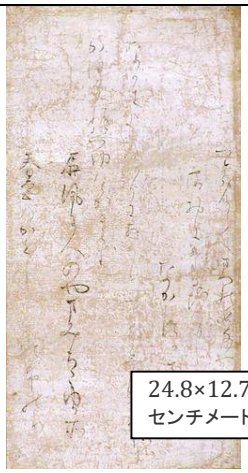
道風が努力を重ねて和様の書を生み出したことから，後世，柳に跳びつく蛙を見て努力の大切さを知ったという逸話（いつわ）が生まれました。

(5) 小野道風のゆかりの作品

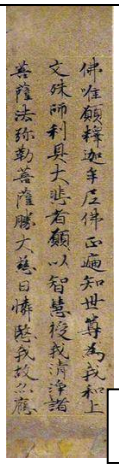
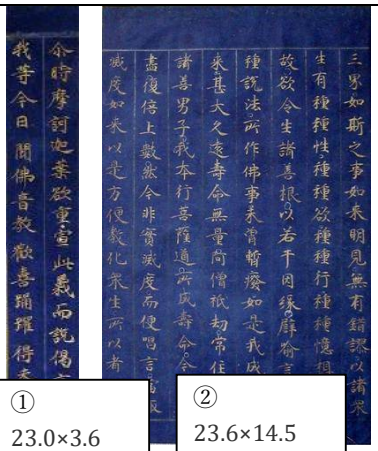
小野道風の真跡で現存しているものは 5 点のみで、玉泉帖(ぎょくせんじょう)、屏風土代(びょうぶどだい)、智証大師諡号勅書(ちしょうだいししごう)、三体白氏詩巻(さんたいはくししかん)、常楽里閑居詩(じょうらくりかんきょのし)があります。

ほかにも小野道風筆と伝えせれる書跡がありますが、そのほとんどは筆者不明のものです。道風の真筆ではないとおもわれますが、平安時代の優れた筆跡なので道風が書いたのだろうと、江戸時代ごろら鑑定されたのです。

7 小野道風伝説

1、所蔵 2、作品 3、指定	内　　容	写　　真
1、観音寺 2、法華経切 3、市指定文化財 **伝小野道風筆**	経切 26 行は法華経を書いたもので気品あり風格の高いもので、「平安中期の写経として秀れたものである」	
1、観音寺 2、新楽府断簡 3、市指定文化財 伝小野道風筆	胡旋女(こせんじょ)、近習(きんしゅう)を戒む也」の詩で、道風の書の特色である豊潤で優雅、ねばり強い線で和様の特色を出している。	 新楽府断簡（観音寺所蔵）
1、道風記念館 2、本阿弥切 3、県指定文化財 伝小野道風筆	古今集を書写したもので、近世初期に本阿弥光悦（ほんあみこうえつ 1558～1637）が一巻を所有していたので、その他の断簡もすべて本阿弥切というようになった。 本品は巻第十八雑歌下の断簡で、白地に牡丹唐草文の料紙に書かれている。古来小野道風筆と伝称されているが、書風などから 12 世紀前半ころの遺品と考えられる。文字は小さく、筆の弾力を生かして変化を多くした優れた書跡である。京都国立博物館と宮内庁に零巻（れいかん）があるほか、40 数葉の断簡の現存が確認されている。 1 品は、長い間所在不明で、陽明文庫所蔵の近衛家熙（このえいえひろ 1667～1736）の臨書によってのみ知られていたものである。 2 品は、江戸時代の木版本である『本朝能書伝』に模刻されている。	 1 16.6×27.2 センチメートル 2 16.7×12.5 センチメートル
1、道風記念館 2、八幡切 3、県指定文化財 伝小野道風筆	麗花集（れいかしゅう）という和歌集の断簡で、もとは冊子本。京都の男山（おとこやま）八幡宮に所蔵されていたので「八幡切」と呼ばれている。料紙は中国から輸入された唐紙（からかみ）で、唐草文様を雲母（きら）で刷り出している。繊細でしかも筆力があり整った書風である。料紙・書風などから 11 世紀後半の書であると考えられる。麗花集は完全な写本が残っていないため、八幡切は国文学史上でも貴重な資料である。	 24.8×12.7 センチメートル

7 小野道風伝説

1、道風記念館 2、愛知切 3、伝小野道風筆	観普賢経（かんふげんきょう）の断簡で、もとは巻子本（かんすぼん）。写経は奈良時代からたくさん書かれているが、平安時代の中頃になるとその書風がやわらかくおだやかな和様になってくる。愛知切は、和様の写経のなかで最も優れたものとされている。小野道風の誕生地が愛知県春日井市だと伝えられることから、愛知切と呼ばれるようになった。同筆の無量義経（むりょうぎきょう）が一巻現存し、これは藤原行成（ふじわらのこうぜい）筆と伝えられている。	 25.1×5.9 センチメートル
1、道風記念館 2、紺紙金字法華経断簡 3、市指定文化財 伝小野道風筆	①は法華経のうち信解品（しんげぼん）の断簡である。 ②は法華経のうち如来寿量品（にょらいじゅりょうぼん）の断簡である。 紺色に染め、たたいて光沢を出した紙に書かれている。紺紙に金字で写経をすることは平安時代以後に流行し、現在でも多くの資料が見られる。優美な和様の写経であることから10世紀後半ころの書と推定される。	 ① 23.0×3.6 センチメート ② 23.6×14.5 センチメートル
1、宮内庁 三の丸尚蔵館 2、玉泉帖 ぎょくせんじょう **3、国宝(真筆)**	白氏文集の詩を道風が興に乗じて書いた巻子本で、巻首が「玉泉南澗花奇怪」の句で始まるのでこの名がある。楷行草を取り混ぜ、文字も大小肥痩で変化に富む。	
1、宮内庁 三の丸尚蔵館 2、屏風土代 びょうぶどだい **3、国宝(真筆)**	土代とは「下書き」の意で、内裏に飾る屏風に揮毫する漢詩の下書きである。 延長６年（928年）11月、道風が勅命を奉じて宮中の屏風に書いたときの下書きで、大江朝綱が作った律詩八首と絶句三首が書かれている。署名はないがその奥書きに、平安時代末期の能書家で鑑識に長じていた藤原定信が、道風35歳の書であることを考証しているので、真跡として確実である。巻子本の行書の詩巻で、料紙は楮紙である。処々に細字を傍書しているのは、その字体を工夫して様々に改めたことを示している。書風は豊麗で温和荘重、筆力が漲り悠揚としている。	

7 小野道風伝説

1、東京国立博物館 2、智証大師諡号勅書 ちしょうだいししごうちょくしょ **3、国宝'(真筆)**	寛平3年（891年)、少僧都法眼和尚位で寂した延暦寺第5世座主円珍が、36年後の延長5年（927年)、法印大和尚位を賜り、「智証大師」と諡されたときの勅書である。文は式部大輔藤原博文の撰、道風34歳の書で、藍の檀紙に行草を交えて太い弾力性のある文字である。	
1、正木美術館(大阪) 2、三体白氏詩巻 さんたいはくししかん **3、国宝(真筆)**	白氏文集を楷行草の各書体で揮毫したもので、八紙を一巻として、巻第五十三の詩六首分が現存する。ちょうど二首分ずつ、楷・行・草の順に調巻されるが、禄禄二年（1529年)の伏見宮貞敦親王の識語によれば、当時すでに、楷書二首、行書二首、草書二首という現在の形であったことが分かる。	
1、前田育徳会（東京） 2、常楽里閑居詩　じょうらくりかんきょのし 3、**国宝(真筆)**	手本用として、白楽天の詩「常楽里閑居」を書いています。	

その他の関連史跡

1、観音寺 2、袴腰付鐘楼	境内には、江戸時代末期の袴(はかま)腰付鐘楼(しゅろう)がある。この種の鐘楼は市内唯一のものである。	
1、観音寺 2、道風公画像	道風公の子小野奉時（ともとき）筆と伝えられ、画像は、道風公の子小野奉時（ともとき）筆と伝えられ、賛は道風の孫天台座主明尊が、道風の歌「穂にはいでぬいかにかせまし花すすき身を秋風にまかせはててん」の一首を継色紙に賛した逸品で、このうたは後撰集巻4に出ている。明尊が永承3年11月12日、道風の命日に比叡山延暦寺の常院に奉納した旨の添書があり、比叡山から拝請されたものである。	
1、道風公園 2、小野朝臣(道風)遺跡之碑	尾張藩の儒学者である秦鼎(はたかなえ)（1761～1831）撰文の「小野朝臣(道風)遺跡之碑」が(文化12年1815)に建てられ、「松河戸の村民はみな道風がここで生まれたということ伝をえている」という内容が刻されている。	

7 小野道風伝説

（注意）
「松河戸町の沿革」は、参考資料の記事を転記又は抜粋してまとめたものです。
間違いや追加など補筆訂正がありましたらご連絡ください。

＜参考資料＞
「書聖小野道風」・「小野道風」・「春日井市史」・「春日井の歴史物語」　春日井市のホームページから
春日井市教育委員会
「書のまち春日井」　平成 30 年 11 月発行　春日井市